

イスラーム地域研究 (IAS) 活動報告より

大阪大学「民族紛争の背景に関する地政学的研究」プロジェクト・KIAS ユニット2 共催 講演会
(2007年11月23日 於千里ライフサイエンスビル)

講演題目：「雲南のムスリムからみる中央アジア」

講演者：馬利章（雲南大学外国語学院アラビア語教育研究室主任 副教授）

本研究会は雲南大学外国語学院の馬利章氏を講師として迎え行われた。馬氏の講演は13世紀のブハラ出身の元朝官僚、賽典赤・瞻思丁（Sayyid Ajall ‘Umar Shams al-Din, 1211~1279）を取り上げ、彼を仲介とした雲南と中央アジアの結びつきを主題とするものであった。

賽典赤はブハラ出身で元朝官僚となった有名なムスリムである。彼は1274年に雲南に赴き、その手腕によって当地方の政治的安定を実現し、治水事業を通じて人びとの生活の安定と向上をもたらした。また当地方にはじめて定住したムスリムとしてモスクを建設し、人びとにイスラームを広めた存在でもあった。他方、儒教の普及にも熱心であり、彼によって儒教の教育機関も建設された。

こうした彼の業績や人柄は現在でも雲南の多くの人びとの記憶に残っており、彼はムスリム、非ムスリムを問わず、現地の人びとに慕われる存在となっている。同時に、ブハラ出身であった彼の存在の記憶によって雲南のムスリムたちは中央アジアと自分たちの関わりを意識する。彼の存在を通じて、現在でも雲南のムスリムたちは活発に中央アジアの国々やイランとの交流を行っているのである。

たしかに講演では賽典赤の理想化された像が語られたにすぎない。だが理想化された記憶のなかの賽典赤こそが、現代雲南においてムスリムと非ムスリム、および雲南と中央アジアを結びつける紐帯となっていることは銘記しておくべきであろう。中国ムスリムの生き方は、ムスリムとしてのアイデンティティと中国人としてのアイデンティティという両端の間に位置する。単にどちらかを選択するというわけではない状況のなか、理想化された先人という要素が果たす役割を問うことは中国だけに限らず、さまざまな地域で（もちろんその場合には両端は別のものになるが）応用可能な問いかけではないだろうか。

報告者：安田 慎（京都大学）

KIAS ユニット3「急進派」研究会

(2007年11月30日 於京都大学)

発表題目：現象としてのジハード主義——その史的展開と現状

発表者：保坂修司（近畿大学）

発表題目：イラクにおける急進派の系譜

発表者：高岡豊（中東調査会）

前回研究会ではデータベース構築および研究計画についての打ちあわせだったので、今回が研究ユニット3の事実上第1回の研究会となる。まずユニット3責任者である保坂氏が、「急進派」の核になるであろう「ジハード主義」の考察を行い、ユニット3の研究のたたき台を作った。

保坂氏は「現象としてのジハード主義」という題名の中の「現象としての」の部分にインターネットその他で入手した情報からさまざまな語句を入れこむことで「ジハード主義」を説明できるのではないかと提案する。たとえばジハード主義を標榜する人々は体制との関係でいうならば、体制に反抗して民衆の支持を得ている人々である。そこで「任侠道としてのジハード主義」という側面で切ることができる。任侠道からさらに男気、武器に対する偏愛などさまざまな語句が浮かんでくる。それ以外に、インターネット・パソコンに強い興味を示していることから「おたくとしての」が、また、あごひげ、ユニフォーム、日本語で言うと「夜露死苦」といった言葉遣いを好むことから「異形としての」も入りそうである。発表の前半は以上のようなプロファイリングと似た手法を使うことがジハード主義の解明に役立つのではないかとという画期的な提案であった。翻って後半は手堅くジハード主義へのリクルートの仕方および再教育プログラム(脱ジハード主義プログラム)が詳しく紹介された。

保坂氏の発表ではジハード主義を扱う手法が模索されていたのに対して、高岡氏の発表は急進派データベース作成に向けてという色彩の強いものであった。イラクの急進派を対象にするとした場合、どの団体が急進派に当たるのかは難しい。だが個々の団体の思想信条、政策を顧みることなく「過激派」「テロリスト」「民兵」などと呼ばれている現状に追従するわけにはいかないの、なにがしかのメルクマールが必要である。高岡氏が提案する基準は以下3点である。①イスラーム的国家、イスラーム的統治を目指している。②その目的を達成するための第一の方法がジハードである。③立憲体制、議会制度を認めない(宗教的信条にもとづいて「政治過程」を拒絶する)。完全ではないにせよ、いったん何が急進派団体が決まれば、あとはどのように観察するかが問題になる。急進派は離合集散が激しく、そこをどう掬い取っていくかが鍵になる。これは3段階に分けて行われる。(1) 代表的な団体の相互関係を局面ごとに整理する(イラクの場合は大きく、諸団体形成期・関係模索期、動揺期、決裂・分裂期に分けられる)。(2) 代表的な団体が発表する声明等から思想的背景や信条を示す情報を抽出する。(3) (1)と(2)の作業をもとに代表的な団体の思想的傾向と系譜を考察する。以上のようなガイドラインのもとに「イラク・イスラーム国」「アンサー・スンナ団」「イラクのイスラーム軍」「ムジャーヒドゥーン軍」「ファーティフーン軍」「ジハードと改革戦線」「イラク抵抗のためのイスラーム戦線」「ジハードと変革戦線」が主な団体として挙げられ、実際に考察が加えられた。

実質第1回目の研究会ということで「急進派」ひいては「ジハード主義」のすべてが語られたわけではないが、これからの研究に明るい見通しがついた実りのある研究会だった。

報告者：編集部

KIAS ユニット1・TIAS グループ2 パレスチナ研究班共催ワークショップ「国連パレスチナ分割決議案<再考>——60周年を機に」

(2007年12月1日 於京都大学)

発表題目：「冷戦開始期における米ソの奇妙な協調——国連パレスチナ分割決議採択にいたる国際

政治過程」

発表者：木村修三（前姫路獨協大学学長）

発表題目：「ピール報告から 181 号まで」

発表者：奈良本英佑（法政大学）

今年 2007 年は、1947 年 11 月 28 日に国連総会でパレスチナ分割決議（国連総会決議 181 号）が採択されてから 60 周年に当たる。パレスチナ問題の直接的な起源となったこの国連決議とは何であったのかを、冷戦開始直後の国際政治状況、とりわけ英米ソなどの大国のパレスチナ問題に対する姿勢と中東域内政治、アラブ諸国の域内情勢、パレスチナの状況などを踏まえつつ再考しようというのがこのワークショップの目的であった。

冒頭で白杵陽・日本女子大学教授から「趣旨説明」が 20 分程度行われた。そこではパレスチナ分割決議案の問題性が、＜分割＞という発想の問題性・米英大国の対応の責任の問題性・米ソ冷戦とパックス・ブリタニカの間隙で起こった問題性・分割案採択の不透明さの問題性・当事者の位置づけの問題性・分割案におけるエルサレムの地位の問題性、の 6 点に整理されて論じられた。

報告 I 「冷戦開始期における米ソの奇妙な協調——国連パレスチナ分割決議採択に至る国際政治過程」は木村修三・前姫路獨協大学学長により行われた。そこでは第二次大戦終結時の中東をめぐる米英ソ関係、国連特別総会におけるパレスチナ問題の審議、グロムイコ演説の衝撃、国連パレスチナ特別委員会（UNSCOP）報告の審議について詳細な説明があり、何故ソ連は分割案を支持したのかという問題提起で結ばれた。木村前学長はソ連のイスラエル承認の迅速さについて考えられる要因を挙げながら、クレムリンの史料が公開されつつある現在、ソ連の国益に何故イスラエル承認が合致したのかをロシア語を駆使して研究する価値があるという将来に向けての課題を示された。

報告 II 「ピール分割案から 181 号へ」は奈良本英佑・法政大学教授により行われた。そこではピール委員会の分割案に始まり国連分割決議に至る過程で浮上した、パレスチナの将来の政体に関する様々な提案が検討された。中でも国連パレスチナ・アドホック委員会の第二小委員会の提案の意義に注目した。奈良本教授が冒頭で、平和運動家ウリ・アヴィネリの国連分割決議への肯定的な評価に違和感を覚えたと話されたのが印象的であった。

続く「コメント」は板垣雄三・東京大学名誉教授と小杉泰・京都大学教授によって行われた。板垣名誉教授はこのようなワークショップにはパレスチナ研究者だけではなく、他分野の研究者にも広く参加してもらうことが必要なのではないかということ、そしてイスラエル建国が国連決議 181 号に基づいていたのではなく、その破壊の上に行われたという事実の確認が必要であると。また何故分割なのか、分割論議の土台は何かという基本的な論点をはじめ、国連分割決議案の検討を具体的な経過の検証にとどまらず、反ユダヤ主義・労働シオニズム・国民国家・植民地主義・国際秩序・ロシア革命の問い直しなどより幅広い観点から行う必要があること、ラテンアメリカ諸国の決議支持を理解するためにヴァチカンの議論を検討する必要があること（カトリシズムと国際政治）、ユダヤ人入植と満蒙開拓団の類似性など日本からの視野も重要であることなどにも言及された。小杉教授は国連分割決議を考える際に、来年はパレスチナ人にとっての「ナクバ」60 周年であること、また今年には 1967 年戦争から 40 周年、1987 年のインティファダ勃発から 20 周年という節目の年であることを強調された。更に分割概念は歴史的に見るとイスラエル建国の礎石として使われ、実態としては単一のイスラエル国家への道であったこと、そしてその単一の実体としてのイスラエル国家が究極的に実現したのが 1967 年戦争における占領地の獲得であったと振り返った。

そこで分割に戻ろうという動きが国連決議 242 に結実するのだが、それでは何故 1947 年時点で分割をしておかなかったのか。それはアラブ側にとって当時はまだ「不義」の質が分からなかったためである。このように論じられた上で、ホロコーストというヨーロッパの罪の償いをパレスチナ人にならせた不正義を不問に付した国際社会の大きな責任に言及され、分割案は試行錯誤の結果もはやうまくいかないのではないかという問題提起で結ばれた。

最後に、報告やコメントを土台に 30 分ほど討論が行われた。1988 年のパレスチナ独立宣言が基にしているのは国連決議 181 か 242 か、国連決議 181 をパレスチナ人側が十分利用していないように見えるがそれは何故か、植民地主義との関連でインドの民族運動とパレスチナ人の闘争の関連などについてのフロアからの質問に、報告者・コメンテーターの先生方が答える形をとり、閉会した。

報告者：森 まり子（東京大学）

KIAS ユニット 4・SIAS グループ 3 共催研究会

(2007 年 12 月 22 日 於上智大学)

発表題目：現代モロッコにおけるスーフィズムと権力

発表者：斉藤剛（日本学術振興会特別研究員）

本研究会は「スーフィー・聖者研究会」（KIAS ユニット 4 と SIAS グループ 3）第 3 回研究会にあたる。今回はアフリカ、特にモロッコとエチオピアを対象とした。

斉藤氏は、「現代モロッコにおけるタリーカと権威——タリーカ・ブーチシーヤを中心的事例として」と題して報告を行った。本報告は、現在モロッコにおいて最も大きな勢力を持つ教団とされるタリーカ・ブーチシーヤの紹介を通して、その勢力展開の背景、およびシャイフの権威がどのような基盤によって支えられているのか、などについて考察を加えたものである。

18 世紀半ばに創設されたタリーカ・ブーチシーヤは、カーディリー系の教団で、現在モロッコ東部ウジュダ近郊のマダグに本拠地を置く。同教団は創設以来、歴代のシャイフのもと他教団との関係を維持しながら発展を遂げ、1960 年代以降、都市におけるタリーカ復興とともにモロッコ全土に影響を及ぼすようになった。2000 年初頭には、数万人の教団員を有したとされ、そのような教団の勢力拡大の背景には、青年層や高級官僚、大学教員、役人などの知識人層への浸透、出稼ぎ移民を媒介としたヨーロッパ諸国など海外への普及、メディアへの露出が挙げられるという。また、成員を補充するための施策も教団発展の重要な要因となったと指摘している。具体的には、おもに教団による教育や啓蒙活動の強化、新入会者のための合宿、夏季スーフィー大学の開講、公の場における数珠の所有や髭を強制しないなど、タリーカに付随する一般的なイメージの転換である。

報告者は、さらにシャイフの正当性を示す根拠についても論じた。中でも強調されるべきは、モロッコ東北部において同教団が、ダルカーウィーヤやティジャーニーヤとの関係を主張した一方で、アラーウィーヤとの関係についてはこれを可能な限り忌避したという点にある。報告者によれば、前者は、ブーチシーヤのスーフィズムとしての正統性を表明するための手段であり、後者については、すでに同地域で確固たる基盤を樹立していたアラーウィーヤへの警戒心に起因する。ブーチシーヤは、他教団との接触の有無を意図的に操作することによって、シャイフの権威確立を促したとされる。

以上のように、斎藤氏は、タリーカ・ブーチシーヤの創設から現在までの教団発展の歴史、シャイフの素描、教団の組織や儀礼などを詳細に分析、紹介するとともに、自身の現地調査にまつわるエピソードも披露された。報告後も参加者からさまざまな質問が寄せられ、それに関する議論も活発に行われた。本報告は、モロッコの事例を通してタリーカを理解するための新たな視点を提示した貴重な報告であった。

報告者：関 佳奈子（上智大学）

発表題目：An ethnomusicological study of the Islamic rituals of Harar, Ethiopia

発表者：Simone TARSITANI（日本学術振興会特別研究員）

Tarsitani 氏の発表は、エチオピアの北東部にあるムスリムの街、ハラールの事例からズィクルの特徴を論じるものであった。発表は大きく二部に分けられ、前半では、ハラールで行われているズィクルの特徴が音楽的側面を中心に報告され、後半には、そうしたズィクルがハラール社会や文化にどのような影響を与えているのかが論じられた。従来のスーフイズム研究では、エチオピアが扱われることはほとんどなく、しかもズィクルを音楽の側面から扱う研究も希少なため、きわめて興味深い発表だった。

前半ではまず、ハラールにおけるズィクルの様子を発表者が長期のフィールドワークで収集した映像や画像データを用いながら説明した。ハラールのズィクルは太鼓や楽器を使って一定のリズムを刻みながら、決まったテキストを全員で読み上げていく。ここまでは他の地域のズィクルと変わるところはないが、ハラール・ズィクルの特徴を音楽的にみるならば、リズムとメロディー双方に独特な点がみられる。たとえば、五音階が主流であるこの地方では珍しく、七音階で構成されたメロディーを持つ。周りの他の地域とは異なるハラールのズィクルのもつ独特さが、発表者の用いた映像や音声データ、楽譜によって視覚的聴覚的に説得力をもって提示された。

後半ではがらりと趣きが変わり、ズィクルの社会的側面が扱われた。近年ハラール独特のズィクルはハラールの人たちにとっても、それ以外の人たちにとってもハラールの文化を代表するものと見なされるようになっていく。その背景には、19世紀以降ハラールがマイノリティとなっていったこと、1990年代以降に見られる文化復興の動き、伝統文化、特にマイノリティが持つ文化に対する態度の変容がある。こうした状況下で、ハラールの人びとがズィクルを、自分たちの文化やアイデンティティを代表するものとして捉えるようになったのである。ある特定の文化への態度の変容はエチオピアに特有ではなく、さまざまな地域で広く見られる現象である。この点で発表者の報告はたんに目新しいものを報告するだけにとどまらない広がりを感じさせるものだった。

発表者の報告は、(1) ズィクルの音楽的解明というスーフイズム・タリーカ研究への新しいアプローチ、(2) 独特な文化に対するそれを所有する人々の意識の変容への着目、という具合にまとめられる。(1) はどちらかといえば「特殊性」、(2) は「普遍性」につながる。スーフイズム・タリーカ研究はつねにある現象の「特殊性」と「普遍性」にかかわらざるをえないが、それが高度なかたちで融合された発表だったと評価したい。

報告者：安田 慎（京都大学）

国際哲学教育研究センター (UTCP)』との共催)

(2007年12月25日 於京都大学)

発表題目: Limits of Rationality in Muslim Experience

発表者: Karim Douglas S. Crow (Nanyang Technological University, Singapore)

第2回イスラーム基礎概念セミナーは、シンガポールの南洋理工大学 (Nanyang Technological University) のカリーム・クロウ氏 (Karim Douglas S. Crow) を招聘し行われた。本発表では理性 ('aql) を題材にイスラームの思考のあり方が論じられた。特に初期イスラーム思想史では伝承と理性の対比構造で語られることが多い。クロウ氏はその図式にのりながら、伝承 (主にハディース) と理性の二つの極の間にイスラーム的な思考が位置づけられること、伝承の極の代表的なものとしてハシュウィー派があり、理性の極には代表的なものとしてムタズィラ学派や哲学者たちがいること、さらに上記の二つの極の中間に位置する立場としてアシュアリー学派を例に挙げた。アシュアリー学派は人間の行為について (神だけが創造するものでもなく、人間だけが生み出すわけではないことを説明するために) 獲得理論を唱え、また、クルアーンの擬人的表現については、「いかにと問うことなく」 (bi-lā kayfa) 受け入れた。この第三の立場は信仰と理性、啓示と理性がうまく調和した例である。さらに哲学者側の人間として Abu al-Hasan al-'Amiri (d.991) が引かれ、かれの場合でも信仰と理性、啓示と理性のバランスがとれていることが確認された。

クロウ氏の主張は、イスラームにおける一般的な思考のあり方が、なんらかの極に寄ったものではなく中間の立場だということである。質疑応答において、イスラーム哲学史に関する質問の他、仏教との比較の観点から質問もなされ、発表者と参加者の間で活発な意見交換が行われた。

報告者: 安田 慎 (京都大学)

KIAS ユニット1・京都大学東南アジア研究所共催研究会

(2007年1月23日 於京都大学)

発表題目: Financing Devotion: Economic Histories of the Southeast Asian Pilgrimage to Mecca

発表者: Eric Tagliacozzo (CSEAS visiting fellow / Associate Professor, History Department, Cornell University)

本研究会は、イスラーム世界における東南アジアと中東地域のネットワークを題材とし、東南アジア研究所との共催で行なわれた。東南アジアと中東地域のネットワーク研究はユニット1の柱の一つである。今回は東南アジア研究所客員研究員であるコーネル大学准教授エリック・タグリアコッツォ氏に「東南アジアからのメッカ巡礼に関する経済史」というタイトルで報告していただいた。タグリアコッツォ氏の報告は19世紀中盤以降のマレー・インドネシア世界を中心に次の5つの局面を経済的分析の対象として行われた。

(1) 現在のインドネシアにあたる、旧オランダ領東インドにおける巡礼者数、巡礼者パスの発行数、およびその価格の変動とオランダ政府による対イスラーム政策、外交政策との相関性 (1872 - 1878)。

(2) 英領マラヤ、および海峡植民地 (現マレーシア) からの巡礼者数、費用の変遷 (1923 -

1939)。

(3) 現代インドネシアにおける、航空機を用いた巡礼者数、航空会社の収入、一人当たりの費用の変遷 (1974 - 1982)。

(4) 1990年から2004年までの巡礼パッケージツアーの最低、最高価格の変動 (シンガポール宗教評議会資料による)。

(5) マレーシアの3つの旅行会社が提供する小巡礼パッケージツアーの価格比較。

以上の巡礼をめぐる経済的変容から、氏は当時の巡礼が、植民地政府の対イスラーム政策、植民地経済の変動に大きく影響され、そして現在は巡礼が「ビジネス化」の波に飲み込まれているとまとめた。氏の発表を受けて会場では活発な質疑応答、議論が行なわれた。

かつて何ヶ月もの月日をかけ、幾重もの困難にさらされながら海を渡る巡礼は命がけであった。それゆえ巡礼を成し遂げることがムスリムにとっての最高の名誉であった。だが、航空機の使用などにより現在の巡礼は簡素化傾向にあり、さまざまな旅行会社、航空会社が巡礼産業へ参入することによって「ビジネス化」が著しくなったのである。東南アジア・イスラームが世界最大規模のムスリム人口を擁するという点からみて、巡礼と経済という人口に左右される2つの要素に着目した点で貴重な研究会であった。

報告者：木下 博子 (京都大学)

大阪大学「民族紛争の背景に関する地政学的研究」プロジェクト・KIAS ユニット2共催 研究会
(2008年1月25日 於大阪大学)

発表題目：イスラーム思想の再構築——時代における要請とインド・ウラマーの視点

発表者：ムーヌッディーン・アキール (大阪大学世界言語研究センター特任研究員)

発表題目：トルコにおける中道派の射程

発表者：澤江史子 (東京外国語大学)

2008年1月25日、大阪大学世界言語研究センターにて、民族紛争の背景に関する地政学的研究中央アジア班第8回研究会との共催でKIAS ユニット2「中道派」研究会が行われた。10月26日に行われたユニット2研究会は、本格的に「中道派」とは何かを問う研究会であった。本研究会はその問題を扱う第2回目の研究会ということになる。イスラーム運動やイスラーム思想、あるいはイスラーム政党には中道派や急進派、また穏健派などのカテゴリーが存在する。しかしそれは、主義主張に示される思想的立場に着目してカテゴライズするのか、それとも行動様式に着目してカテゴライズするのかによって、当然のことながら差異が生じるであろう。またカテゴライズの問題とは別に地域的な差異も考慮に入れなければならないだろう。こうして「中道派」を把握することにはさまざまな困難が生じるのである。それゆえ、同研究会のテーマであるイスラームにおける「中道派」をどのように捉えるのかという問題が第一義的に立ち上がってくる。これが前回の研究会で出された問いであった。こうした問いに対する、好対照な二種類の回答が本研究会でなされた。

報告者：黒田 賢治 (京都大学)

最初の発表はムーヌッディーン・アキール氏による「イスラーム思想の再構築——時代におけ

る要請とインド・ウラマーの視点」である。アキール氏は現在大阪大学言語研究センターの特任研究員として来日中であり、近現代南アジアのイスラーム復興潮流にかんする該博な知識を備えたパキスタンを代表するムスリム知識人である。イスラーム世界における「中道派」勢力を解明することで穏健な草の根のイスラーム復興の実相に迫ろうとする本研究会の趣旨に賛同していただき、発表の労をとられた。以下にそのあらましを述べる。

発表の要諦は、近代西洋との邂逅を迎えたイスラーム世界、特にインド亜大陸において、イスラームに新たな解釈が施されていく流れを丹念におさえていくことであった。注目に値する人物として、シャー・ワリーウッラー、サイイド・アフマド・ハーン、マウラヴィー・チラグ・アリー、アースィフ・ビン・アリー・アスガル・ファイズイー、ムハンマド・イクバル、サイイド・アブドゥル・ラティーフといったイスラーム思想家を取り上げ、彼らの思想にはイジュティハードの奨励とイスラーム法の重視が通底していること、そのような共通点を持ちながら時代時代の要請に柔軟に対応したイスラーム思想の構築・再構築が目指されたことを明らかにした。そのなかで興味深い点を二点指摘しておく。(1) やはり南アジア最大の思想家イクバルによるイスラームの体系的再解釈と現代的再構築に関して多くの時間が割かれたが、イスラーム国家において議会における決定はイジュマーによってのみ成立すること、その意味でイクバルが近代西洋の民主主義を肯定的に捉えていた可能性がある」と指摘された。(2) またラティーフは独特のイジュティハード論をもっており、イジュティハードを行うためには(あらゆる分派に共通するハディース集を作ることを目的とする)ハディース考証学の再開と再編纂が行われなければならないと考えていた。特に(2)の考え方が他の地域にも見られるのかどうかは南アジアの中道的思想の特質を見定めるうえで重要であると感じた。

質疑応答は多岐にわたったが、もっとも重要なものだけをとりあげる。本発表の中道派研究としての意義についてである。アキール氏が近現代パキスタン思想史を概観するなかで、中道派として抽出したのは、現状の伝統を認めつつ国家や国民、社会のあり方といった変革要素を措定して柔軟に時代の要請に応じていく人々であった。ここで重要なのは「現実に対応する柔軟さ」である。たとえばこの定義によると急進派は現状を一切拒否して秩序の転覆に乗り出す強行的で硬直した姿勢をとる人々となる。さしあたりの規定としてかなり重みのある中道派の捉えかたであるが、これがどこまで妥当するのかを検証することがわれわれユニット2の責務であろう。

報告書：平野 淳一 (京都大学)

澤江氏による発表は現代トルコのイスラーム政党によって「中道派」の一つの在り方を提示するものであった。発表者がトルコの実情に即した「中道派」規定を提示しようとするのは、イスラーム運動研究におけるトルコ特殊論というべきものが存在するからである。思想的に見ても、いずれのイスラーム政党も極端な主義主張は行わず、また行動様式から見ても、いずれも政党という民主主義的な枠組みによって行動するので、現代トルコで展開されているイスラーム政党の活動はみな中道派に含まれてしまうことになる。しかし諸政党はみな同じかと言えば、そうではない。トルコのなかにトルコ特有の中道派的な存在がありうる可能性は十分にある。それゆえ現代トルコにおける「中道派」の分析枠組みの設定が必要となってくるのである。

発表者は、トルコ特殊論を脱却するとともに、イスラーム運動全体の新たなマトリクスを提起するために、宗教経済学における市場理論の一つの視座として提示する。しかしそれは各運動や政党に対して、いわば先取りされた分類基準が使用されており、完全に実情に則しているとは言いがたい。そこで発表者はトルコにおいて最も「中道派」と考えられる「公正と発展党」を具体的事例として

そこに新たな基準となりうる「中道性」をあぶりだそうとした。

トルコにおけるイスラーム政党がみな行動様式的に中道派に分類される。その点では公正と発展党も例外ではない。また思想的観点から見ても、世俗主義でも、極端なイスラーム主義でもないのので何の変哲もないように見える。しかし同党が主張する政教分離を見ると、リベラル性を表しているというよりも、イスラーム的であることを放棄しているようにみえる。たとえば、かれらはイスラーム政党でありながら、ムスリムも非ムスリムも同党に参加しうる政党を目指している。

つまり、同党が自らを位置づける際には、世俗主義でも極端なイスラーム主義でもないというネガティブセンテンスによる自己の位置づけを試みるのではなく、世俗主義やイスラーム主義を超克し、両者を包摂する立場としての自己の位置づけを行っているものと解釈することができる。このような両者の立場を包摂、あるいは超克する立場こそが、発表者によるトルコにおける「中道派」であった。

質疑応答においては、トルコの政権与党である公正と発展党をモデルとした発表者の提案が他地域のイスラーム運動に対しても適用可能かと言った問題を中心にして、議論が展開された。前回の研究会で横田氏が言及したエジプトのワサト党も同じように考えられるかもしれない。われわれはこれまで「中道」とは両極端を排除したものだと考えてきたが、両極端を包摂する「中道」がありうることは気づけなかった。公正と発展党という事例の面白さにとどまらない理論的な豊潤さをもたらす発表であった。

報告者：黒田 賢治（京都大学）

文部科学省「世界を対象としたニーズ対応型地域研究推進型事業：中東とアジアをつなぐ新たな地域概念・共生関係の模索」プロジェクト・KIAS ユニット2共催 研究会
(2008年1月28日 於京都大学)

発表題目：Democracies, insurgencies and terrorism, and peace building

発表者：Anthony Oberschall (University of North Carolina)

ユニット2としては少々毛色が異なる研究会となった。発表者のノースカロライナ大学名誉教授 Anthony Oberschall 氏は1970年代から資源動員論などで有名な、社会運動研究の代表的研究者であり、論文“*Theories of Social Conflict*,”*Annual Review of Sociology* 4 (1978), pp.291-315 が邦訳（塩原勉編 片桐新自・牟田和恵・大畑裕嗣・鶴飼孝造訳・著『資源動員論と組織戦略』新曜社、1989年、51-91頁）されるなど日本でもよく知られている。

本発表は出版されたばかりの *Conflict and Peace Building in Divided Societies: Responses to Ethnic Violence*, London: Routledge, を下敷きにしてなされた。以下に発表の内容をまとめておく。

これまで非従来型戦争（国家対国家のように同等な身分間の戦争でなく、非対称的戦争）で和平プロセスが成功するためのモデルが作られてきたが、そうしたモデルは世俗的民族紛争の研究をもとに組み上げられたものであり、これがイスラームのジハード主義者たちによる紛争にそのまま当て嵌まるわけではない。このような逸脱したケースを考慮にいれつつ、民主主義を標榜する政府がいかに非従来型戦争に従事すべきかを考察し、和平プロセスモデルを再検討することが発表者の狙いである。当然、そこにはアメリカのイラク政策への批判が込められている。

一般的に、民主国家が非従来型戦争を行えば、不可避免的に人権を侵害することになるというジレンマが生じる。このジレンマに対処するため発表者は行動主義アプローチを採る。これによれば、民主国家が非従来型戦争に関わったときに犯す人権侵害は必要最小限の悪と見なされ、焦点は必要最小限の悪をどのようにコントロールするかという問題に移る。この問題の検討は二つの視点からなされた。

行き過ぎた人権侵害をどのように抑制するか。非従来型戦争における戦略には大きく「探して撲滅する」(search and destroy)のか「一掃して保持する」(clear and hold)の二通りの戦略が採られている。ゲリラと一般人を区別することが困難なので、前者を選択すると無実の者を拘束して拷問する可能性が高くなり、一般人の反感を買って情報が得にくくなる。対して後者の場合、ゲリラのいない地域を作り、それを保持していくので、拘束・拷問の可能性が低くなり、一般人からの信頼も得やすい。したがって「一掃して保持する」戦略の方が上述のジレンマを小さくすることができる。

行き過ぎた人権侵害を防ぐ第二の視点はその抑制方法である。非従来型戦争で行われる従来型戦争における戦争法・正義からの逸脱行為は、継続的ではなく、できるだけ数少なく、法を制定して行われ、さらにそれが一定期間ごとにチェックされるものでなければならない。そうでなければ和平(平和)へのプロセスが損なわれる可能性がある。

以上の発表はわれわれにとってなじみの薄い社会学的方法論を用いて行われた。特に「～すべし」を理論的に探究する行政学の系統にある社会学は、地域研究にはなじまないだろう。しかし実証から理論を組み立て、理論を実証から検討していく手法(理論と実証の互酬)は多いに参考になった。

報告者：編集部

大阪大学「民族紛争の背景に関する地政学的研究」プロジェクト・KIASユニット2共催 研究会
(2008年1月31日 於大阪大学)

発表題目：パキスタン情勢の現在

発表者：山根 聡(大阪大学世界言語研究センター准教授、KIASユニット2責任者)

発表者：萬宮健策(大阪大学世界言語研究センター講師)

ユニット2は各地域の現況を把握しておくことをユニット活動の柱の一つとしている。今回の報告はパキスタンに関してなされた。パキスタンは、中央アジア地域と政治・経済的に深くかかわっており、同国の安定は中央アジアを含めた地域全体の安全保障に影響を与える。昨年末のブットー元首相暗殺を含む同国情勢の流動化は、地政学上大きな懸念となっていること、さらに2月18日に行われる予定の総選挙の結果如何によってパキスタンにおける「中道的」在り方に変化が生じる可能性があるため、山根氏、萬宮氏2名による事前報告が行われた。報告ではまず、パキスタン建国以降の政治情勢が概観され、「啓蒙的穩健主義」としての中道派的志向を目指すムシャッラフ政権の現状が紹介された。

続いて萬宮氏は、パキスタンにおける総選挙の具体的な方法について過去の選挙の写真や資料を紹介しながら報告した。報告に対し、参加者である在カーブル日本国大使館員から、ムシャッラフがかつてトルコに在住した経験から、トルコのアタテュルクのような改革を目指しているのではないかとの指摘がなされた点は非常に興味深いものであった。

報告者：山根 聡（大阪大学）

KIAS・京都大学 G-COE「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」・日本学術振興会科学研究費 (A)「現代アジア・アフリカ地域におけるトランスナショナルな政治社会運動の比較研究」(東京外国語大学) 共催国際ワークショップ Islamic System, Modernity and Institutional Transformation (2008年2月1～2日 於京都大学)

京都大学 G-COE「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」および日本学術振興会科学研究費 (A)「現代アジア・アフリカ地域におけるトランスナショナルな政治社会運動の比較研究」(東京外国語大学) の協力を得て、京都大学拠点海外共同研究者である Mohammed El-Sayed Selim 氏の基調講演を中心に配し、さまざまな国から日本に集まった若手研究者が自由に参加し発表できる新しい形の国際ワークショップを企画した。この国際ワークショップは、京都大学拠点研究グループに属するユニット1からユニット5まですべてのユニットが協力して行う共同作業でもあり、京都大学拠点の活動全体を未来に託す意味も込められている。京都大学拠点のテーマである「イスラーム世界の国際組織」をさらに敷衍化し、イスラームのシステムと現代がどのように関わっているのか、また現代のように政治的社会的制度が激しく変容するなかでイスラームのシステムがどのように対応しているのかという問いかけのもとでイスラーム世界の国際組織を考えていかなければならないという問題意識がこのワークショップの背後にあった。

プログラムは以下のとおりである。

February 1 (Fri.)

15:00-15:10 Opening

15:10-16:40 Session 1(Chair: TONAGA Yasushi, Kyoto University)

Speaker 1: Idiris DANISMAZ (Kyoto University)

Title: Ethical and Practical Perspective in Isma'il Haqqi Bursawi's (d.1725) Sufi Exegesis Ruh al-Bayan.

Speaker 2: MARUYAMA Daisuke (Kyoto University)

Title: What is Wali?: In the Tradition of Islamic Theology.

Speaker 3: KINOSHITA Hiroko (Kyoto University)

Title: Transformation of the Islamic Network between Middle East and the Malay-Indonesian World: A Historical Observation.

16:55-18:25 Session 2(Chair: TONAGA Yasushi)

Speaker 1: Waheeb AL-ERYANI (Tokyo University of Foreign Studies)

Title: State Legitimacy and Secession Calls in the South of Yemen.

Speaker 2: YASUDA Shin (Kyoto University)

Title: The Pilgrimage to the Shi'ite Mausoleums in Contemporary Syria.

Speaker 3: HIRAMATSU Aiko (Kyoto University)

Title: Islam and Democratization in Kuwait.

February 2(Sat.)

11:00-12:30 Keynote Speech

Mohammad El-Sayed SELIM,

“Models of Dialogue among Civilizations, the Pre-requisites of an Effective Model.”

13:30-15:00 Session 3 (Chair: KOSUGI Yasushi, Kyoto University)

Speaker 1: YAMAOKA Dai (Kyoto University)

Title: Cooperation and Rivalry among the Iraqi Islamic Parties: An Analysis of Ideological and Political Orientations in the 1980s.

Speaker 2: HORINUKI Koji (Kyoto University)

Title: Islam, Arabness and State Formation: A Debate on the Demographic Imbalance in the UAE.

Speaker 3: Housam DARWISHEH (Tokyo University of Foreign Studies)

Title: Political Activism under Mubarak's Authoritarian Electoral Engineering in the 1980s.

15:15-16:45 Session 4(Chair: KOSUGI Yasushi)

Speaker 1: TOBINA Hitomi (Kyoto University)

Title: To Maintain Jerusalemite 'rights': Palestinian Lives under the Threat of House Demolition.

Speaker 2: KURODA Kenji (Kyoto University)

Title: The Institution of Marji' al-Taqlid after the Islamic Revolution in Iran.

Speaker 3: HIRANO Junichi (Kyoto University)

Title: Beyond the Sunni-Shiite Dichotomy: Rethinking al-Afghani and His Pan-Islamism.

16:45-17:45 Session 5 (Chair: KOSUGI Yasushi)

Speaker 1: Esen URMANOV (Tokyo University of Foreign Studies)

Title: Islamic Radicalism in Central Asia.

Speaker 2: Walaa HASSAN & Intissar Al-FARTTOOSI(Tokyo University of Foreign Studies)

Title: Forced Displacement Crisis in the Middle East: Case of Iraq.

17:45-17:50 Closing

報告者：編集部